

美乃はな

鈴木  
梅仙

心花のほろろ

# 墨の話

(明治三十三年五月雑誌「太陽」及「美術協會報告書」所掲)

此程さる知己の先生が愚老に對つて仰るには、卿が是迄墨法の為に費やした苦心は容易のものではない。夫が爲に墨狂の綽號まで得た程であるが、世間には未委く御存知ない諸君も多い。因て従来の経歴を一通り御話を爲て見ては如何だと云ふことでありました。成程それも面白からう、如何にも自分で今から回顧て考て見ても殆おかしい程凝たものでありました。

全体我邦では唐墨と云へば其製法が非常に難くて、日本人には逆も出来ぬものと云ふ様な觀念があつて、實は私も最初其様な考を持って居りました。然るに、一旦其むづかしいと云ふ墨法をば何卒して發明したいとの志願を起してから以来、財産も妻子の事も一切打捨て、饑寒の一身に迫て来ることも忘れて了て、只墨の事にばかり夢中に成て居りました。善く言へば堅忍不拔・百折不撓とでも申しませうか。悪く言へば一種の狂人で、墨狂と呼ばれるのも據ない。兎に角愚老が生来狂人と喚ばれる資格を持って居たと云ふ事實から御話し申すのも一興であらふ。

又二には愚老が墨と云ふのに就て三十四年来研究を致した結果、少しく得る所が有たと自信致して居りますで、今その卑見の一端を御話し申すのも多少諸君の御参考に益する所が有うかと存じまして、すなわち乃今日美術家諸君の御集會を幸は不辯ながら暫時御耳を汚すことに相成りました。尤墨の事に就ては、嘗て『梅仙墨談』と云ふ小冊子を著して、知己の諸先生方へ差上げたことがありますから、夫を御讀に成た御方は、大概墨に就ての鄙見の趣は御承知でありませが、猶又御疑の點がありましたならば御尋に應じて、承知致し居る丈は御答を致す積りであり升。

偕自分は元來非常に物に凝る性でありましたが、幼年の頃は至て多病で兒童普通の教育もろく

受ることが出来ませんで、漸十四の歳から手習讀書を始めました。然る處まだ味も能く解りませんが、只何となく此上もなく面白く感じまして、何卒斯道の奥を究めて見たいと考へて、住宅から二十丁許隔た田邊町と申す處の中田先生の門に入て、夫から十六の歳まで足掛三年の間、雨にも風にも半日の休みも惜くて、晝の行厨も持たずに通ひつめました。勿論両親は私の病身なのを氣遣うて、餘り勉強するなど常々戒められました。私は衣服などは何様に汚くても宜いから其代に書籍を購て下されと強て嘆願して、三年の間朝夕二食で、夜分は自宅で必午前の二時か三時頃迄讀書写本などを致しました。けれども生来の遲鈍でなかく、埒が明きません。併し負惜みの強い方でありまして、最初四書の素讀から始めて、十六の歳までに、左やら右やら、五經・文選蒙求・十八史略・史記・左傳・國語等の課程を卒て、四書五經の講義まで殆晝夜兼行の姿で進みました。

勿論當時は、古今の様に衛生などと云ふことは露ばかりも考へないので、只々彼の董仲舒は三年園を窺はなかつたとか。物徂来は朝夕光を追て東窓西窓と座を移して書を讀だとか云ふ様な事のみにを龜鑑に致して、常に己の勉強が足らぬとばかり思て、孜孜兀々と遣て居りました。然る處其内に段々と逆上して来て、耳が熱く成て夜分眠られない。因て手拭を冷水に浸しては夫を左右の耳に當て辛うじて眠に就くと云ふ様な次第。暫すると又齒が痛み出して殆耐へ難い。夫をもジツト辛抱して、親共へは毫も申しません。申せば直に讀書を廃めると云はれるのが何よりも悲しい。左右する内に到頭左の耳が聾れて了たので露頭あに及んで、大に叱られたことがありました。

然るに十六歳の秋に至て、今度は不圖吐血を始めて、是には自分も大に驚きまして、斯様に弱い體では所詮學問は出来ぬことかと歎息しました。乃で本箱筆硯の類は皆親に取上げられる。是では生甲斐も無いと考へながら、夫から四五年の間種々の療養致したが中々治りません。然るに或人から爾の病氣は醫藥では逆も治る見込が無いから、一番灸治を試みては如何だ。何でも口から艾の臭氣の出る位まですゑれば必治ると云はれまして、忽例の不負氣を作して、好し此軀軀を焼殺すか、早く治して志を遂げるか、二つ一つだ、遣て見やうと云ふので、夫から二年ばかりの間毎月必三日

づゝ多分の灸をすえました。夏の日長の頃には、一日に大抵三萬五千炷程もすえました。

ところが今では野蠻とか何とか云はれませうが、此灸治が私の躰には殊の外よく利きまして、さし難治の吐血症がスツカリ拭取た様に癒りました。サア是ならば大丈夫だといので、又々懲りず讀書を始めた。夫から又石田醉古先生の門に入て詩を學ふ。詩會の晩には風か吹かうが雨が降らうが構はず通う。帰途に町盡頭で雞の聲を聞くことは常の様でムりました。夫からまた、彼の史記と云ふ書の餘り誤謬の多いのを遺憾に思ひまして其正誤を企る。又一方には『四書薈說』と云ふものを編みかける。杯（等）と云ふ様な譯で、此等の稿本も大分の冊数に上りましたが、後に神田の大火で悉焼て了ひました。夫れは兎も角も右様に學問が面白く成て来るに随つて愈耽り益凝る。

すると今度は腦勞と云ふ症が生まして、額が岑々と痛んで耐らない、時々目が眩む様に成た。是に於て自分もつく／＼歎息して、斯様な工合では到底學問は出来ぬ、さて然らば何か此身に相應しい仕事で、學事の補助にもなり、國益の片端ともなる様な業は無からうかと種々考へました。

然るに其頃私の兄が松煙問屋を致して居りましたので、偶思ひ着いたのは外でもない、即墨を製造して見やうと云ふことで、殊に自分の生國紀州は昔から、藤代墨と稱へて本邦では一番古い有名な墨の産地であつたのが、後世其製造の殆中絶した爲に、吾人多くは其事を知らないで、却て夫よりも遙後に始めた奈良を以て墨の本場の如くに心得て居るのは残念など云ふ考から、旁製墨家に成らうと決心致して、丁度明治の初年頃から、田邊町で製造を始めました。

然る所、又例の凝性で、非常に墨の方が面白く成て来て、人々から官途を勧められたことも屢でありましたが、そんな方へは更に耳を傾けず、一切他の功名富貴の念を擲て、何卒して彼の蘇東坡や黄山谷に賞られた唐の李延珪の墨の様な美墨を造り出して、今の唐墨（即ち清墨）の輸入を防ぎたいと思つて、色々と製して試しましたが、どうも粘り過ちとか、色が思はしくないとか、兎角書畫に適する程の良品が出来ないので非常に苦心をいたしました。因で一時は支那まで出掛て傳授を受けて来やうかとも思ひました。けれども又熟く考へて見ると、夫は到底無益である。全体墨の製法杯（等）と

いうふものは、家々で尤秘密にして置くもので、親戚朋友の間でも容易に傳授するものでない。況て外國人杯（等）に實を語る筈はない。其的例（適）は明の程君房と云ふ人、是は名高い製墨家でありましたが、其家に方于魯と云ふ人、是も後に製墨の名人に成て後世には方程と并へ称せられた程の人であるが、夫が一時食客になつて居つて、後に製墨を始めた。すると程君房が家法を竊だとして大に怒て、恩を知らぬ不義漢であると云ふので、中山狼の傳と云うものを書いて方于魯を譏たことがある。此一事でも大抵傳授のむづかしいと云ふ事情は分て居る。

然らば如何したら可からう。此上は書物に據るより外に仕方がない。乃て今度は專墨書の研究に取掛りました。先づ例の程氏の墨苑・方于魯の墨譜を始めとして、明の王動貫の墨書・宋の晁説・之の墨經乃至太平御覽・淵鑑類函・格致鏡原杯（等）と云ふ書類を段々と涉獵致して、一々夫を實地に試験する。随て其結果を日記に留ると云ふ様な都合で、遂に『墨苑日涉』四冊を綴りました。扱明以上の書に據て實地製造して試る。處が中には随分無稽の説も有り升が、兎に角本當の墨に結成る分は、熟れも皆従来の和墨と同じ物に成て了ひ升。是に於て和墨の製法は全く支那の古法（中略）に崩れて来たものに相違ないと云ふことが始めて分りました。

けれども唯夫だけの事で、自分の意に適した墨が十年遣ても、十五年遣ても尚出来ない。彼是する内に到頭一萬圓許の資本を烏有に歸して了た。サア資本はなくなる、佳い墨は出来ない。年々種々の方案を凝らして墨が出来る、夫を画仙紙や白紙に試みて墨色を吟味する。或時硯を出して水を呼んだ小供も居らぬ、幸ひ傍に味醂耐が有た。取敢へず夫を水の代にして磨て書た。蒼潤にして光澤あり湿れたやうだ。是ハ面白い、色々して見ても出来ないが、膠を味醂で焚て見るべしと、早速三升買ひ来り膠を焚くべしと命じた。暫く一時間もすると仕事場より職工が旦那々々と頻りに喚ぶ。直に往て見ると驚た。釜中一面に蟲の如きものに成て水氣ハ少しもなぬ。杓子に取て之を見るに細管状をなしてキリ／＼巻いて居る。開いて見れば凡そ三四分位の丸き片になりたる物が巻いてある。不思議に科學上の獸皮分析が出来たのであつた。此薄き小さき片々が幾千万枚重て皮をなし、

刀でも容易に破れにくいもの出来たのだ。此膠を製するには牛皮を綺麗に洗ひ二晝夜も焚き泡を去り湯に成りたるものを布袋に漉して、何もなき湯の如きものを室蓋に入れ、放冷して片々に製したるものが猶其性を失はぬと云ふが、他の分析家の言の如く本質は何つ迄も易らぬ仕方がない。室蓋に入れて乾かして三年目に鉄鎚で碎いて見る。瑪瑙の如き光りありも、尤や組織も解けたのであらうと焚て見る。又本の細管状となりて放棄した事もあつた。偕て親戚故舊には見離される。世間からは狂人と嘲られると云ふ様な始末。進退谷さわかつて最早さきを投るより外はないと云ふ迄に成た。併し又孰々考へて見れば、如何にしても此儘で棄て了ふのは残念である。何か良い方法の無いものかと数日の間慘憺として寢食も忘れて工夫を凝し詰めました。

時に一夜ふと心に浮んだのは、易の繫辭傳に、書ハ不レ盡サ言ヲ言ハ不レ盡サ意ヲと云ふことがある。又莊子の天道篇に桓公が書を讀で居ると、堂下に車輪を劉て居た輪扁と云ふ職工が突如上つて来て、君の御讀みなさるのは何でムると尋ねたので、桓公が是は聖人の言であると答へられた。すると又其の聖人は、今生きて居ますかと問うたれば、イヤ已ニ死セリ矣と答られた。因で輪扁が、然ラ則君之所レ讀ム者、古人之糟粕已ト罵つたと云ふ面白い話が載せてある。ア、此處だ、自分が従来許多の歲月と資本とを費して竟に成功せなんだのは、全く他人の言にのみ依頼して居た故である。古人の糟粕ばかり嘗て居た故である。抑道は在らざる所なし。乾坤隨處に吾が師ありで、大凡人間の爲す所は、たとへは書畫にもせよ詩文にもせよ、器物機械の製作にもせよ、其蘊奥の秘鑰は常に天地の間に蓄藏せられて永劫に亘て泯びぬものである。只夫を人間が取れば獲られるし、取らねば獲られぬまでのこと。彼の方程式して何物ぞ。彼も人なり、我も人なり、既に古人の作り出した程の物を、今人に出來ぬと云ふ理は決して無い、と云ふ考が附きました。

因で忽今まで塞て居た道路が一時に開けた様な心地に成て、當下覺えず口を衝て發した拙作がござりますから、一寸御笑に供へませう。

誰カ知ン糟魄本無キレ眞。手ニ擲テ方書ヲ一思入ルレ神ニ。

靈草秘泉隨處ニ在リ。彼何人<sup>リヤ</sup>也我何人<sup>ソ</sup>。

方于魯と云ふ人の傳に、靈艸秘泉を得てから墨法が大に進んだとムリますで、且つその典故を用ひた迄でムリ升。

閑話休題、それから翌朝に成りますと、不思議なことには自分の胸襟が分外に清涼に覺えて、見る物聞く物が昨日とはガラリと變て、全然別天地に生れ出たやうな心地。佛説に謂ふ歡喜踴躍と云ふのも斯様なものかと思はれる位、只何となく愉快で堪らない。爾時に又一つ大に自分の精神を感動して、愈方程も負けない美墨が我邦で出来るに相違ないと云ふ豫期心を鼓舞させた事情がある。夫は本邦で出来る油煙を視るに、上等品になるほど一種微妙なる蒼翠色を含んで、言ふに言はれぬ愛すべき色澤に富んで居る。全躰この油煙でも墨でも、只黒い一方の物かと云ふに決して然でない。自然とその中に五色の別があつて、白ッぽく黒いとか、赤ッぽく黒いとか、青みを帯びて黒いとか云ふ様に、必差等あるものである。其中で此の青くして黒いと云ふのが最高尚優美なもので、書でも畫でも、濃淡共に明了して而も穩しく見える。即東坡の言はれた翠色冷光或は蒼潤と云ふのが是である。そこで彼の方于魯・程君房の墨が大に聲價を博した所以は何であるかと云ふと、やはり主として此の愛すべき翠色冷光を含んで、且つ千歳不乾と云て、いつまでも潤うて居る様な妙が有る故である。然るに今の唐墨に至ては孰も赭色を含んで乾て居る。夫故どうも俗氣が有て了然とせぬ。之を淡墨に使ふときは必赭氣が浮く。是決して墨の眞色でない。今の唐墨は何程高價の物でも多少此の弊を免れない。然るに今我邦の上等烟を視ると、毫もこの厭ふべき赭色を帯びて居らぬのみならず、尤愛すべき蒼翠色を十分に含んで居る。顧ふに是は地味が萬國に勝れて居るからであらう。

全躰我邦は宗教でも・學術でも・工藝でも、其の初は大抵外國から將て来たものであるが、後には却て此方が本家の様に成つたものが甚だ多い。殊に美術では今日宇内に鳴て居る。已に斯様な人種を生ずる國土であるから、方<sup>ハ</sup>以<sup>テ</sup>類<sup>ヲ</sup>聚<sup>マル</sup>の理数で、箇の油煙の如き微物に居るまでも自然に美と云ふ性質を具備して居るのであらう。随て墨の如きも結局支那より上等の物が出来ねばならぬ理

であらう。果して然らば今後油煙と膠の製法に十分の注意を加へて遣たことならば、必定方于魯君房を凌ぐ程の美墨が出来るに相違ないと云ふ觀念が浮びましたので、夫から以来は勇氣が以前に百倍して、最早墨法に就ては断然支那人にも問はず・同業者にも謀らず、一向に己の心を師として、油煙も親ら製して試みる。膠も自分で拵へて験す。其他凡墨の製法に関する事は、殆ど爲さざる所なしと謂ても可からうと思ふ位で、斯様にして又々数年の研究を積みまして、漸近年に至て始めて彼の莊子に謂はゆる不<sub>レ</sub>徐<sub>ナラ</sub>不<sub>レ</sub>疾<sub>ナラ</sub>得<sub>テ</sub>之<sub>ヲ</sub>於<sub>ニ</sub>手<sub>ニ</sub>而<sub>レ</sub>應<sub>ス</sub>於<sub>ニ</sub>心<sub>ニ</sub>口<sub>ニ</sub>不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>言<sub>フ</sub>有<sub>テ</sub>數<sub>存</sub>焉<sub>於</sub>其<sub>ノ</sub>間<sub>ニ</sub>の妙處が分明と會得て參りました。乃是に於て彼の李延珪の秘法と云ふのも断じて是に相違ない東坡や山谷が再生して来ても必複華客に成て呉るであらう。方程の二氏が再現れて来ても最早毫も恐るゝに足らぬと云ふ自信が確乎と立つて參りましたのでムリ升。

猶又前段研究の結果として、彼の支那人が秘して人に語げぬと云ふ今の唐墨の製法も、悉皆分明て參りました。夫に就て大に諸君の御注意を願ひたいのは外でもない。即今の唐墨と云ふものは、明代以上の硬墨法と違て、柔墨法に由て製へたものでありますから、唐紙とか画仙紙とか乃至統綾の類、凡て下地の和らか物には用ひられますが、堅い力のある物、即木・竹・日本紙・日本絹、或は支那古代の性の善い絹紙の類にはサツパリ乗らない、誠に力の弱い墨である。夫故物に附着ても甚脱ち易い。之を書画に用れば百年か百五十年も経て其表面の煤を洗ふと、煤のまだ落ちぬ前に墨の方が脱ちたがると云ふ様な患がある。百年・百五十年は扱措き近い例が、諸官省杯盃の標札を御覧なされ、唐墨で書たものは僅に五年とも保ちませぬ。尤も墨の質が軟いから、磨る時に卸りも早く、粘も淡泊で運筆に骨が折れない。夫故人が多く唐墨を好みますが、後の爲を考へて見ると誠に不都合な墨でムリ升。兎角吾人は墨の良否を論ずるに、其遣い易いと遣い悪いとを以て判断を下すが、是は大に誤謬た考であらうと思ふ。譬へば馬を御する様なもので、良馬と云ふものは決して只柔順猫の如きものではない。之を乗りこなすには随分骨の折れるものである。けれども其位の馬でなければ戦場に臨んでトント役に立たぬ。彼の関雲長を乗せて五関を踏破た赤兎馬の如きも、若し柔弱

な大將が騎たならば、必手に合はなんだであらう。又騎手の方から言うても、斯様な馬をば善く乗りこなしてこそ始めて其人の力量も顕れるのである。墨も亦此の如くで、其絹紙に附着て永く脱落ない所以は主として膠の力である。然るに古人が此の肝腎の膠氣の殆皆無と謂ても可い位無力の墨を珍重するのは、恰も駿馬の卸が難きを嫌うて、駑馬の柔順なるを愛すると一般の謬見ではあるまいかと思ふ。兎角人情は逸樂を好むので、只當座遣ひよいものでさへあれば、忽ちそれが古に流行して、後の爲と云ふ様なことはツイ忘れて了ふが、總別初に容易な仕事と云ふものは矢張其丈の價値しか無いもので、骨を折れば亦骨を折た丈の効能が必後日に顕れるものである。古の良墨が千歳を経ても色澤も変せず剥脱もしないと云ふのは、畢竟膠の力が其丈強いからで、随て染筆の際には多少骨が折れたに相違ない。けれども古人は善く夫を遣ひこなした。勿論斯様な硬墨を使ふには眞の腕力を振はねば筆が自由に絹紙の上を走らぬ。古人は此の眞の力を用ひた故、自然に筆勢の遒勁な處・氣象の剛健な處が絹紙の表に顕れて、今人を感服させる様な物が出来たのである。今人と雖も徒に骨惜はかりせず、少く工夫を費しさへすれば、此の硬墨が遣へぬと云ふことは決して無い。現に愚老の製します墨は右に申す硬墨の法で、殊に皆新墨でありますから、多少粘氣を持って居る。けれども知己の諸大家先生方から更に御小言のないのみならず、大に賞讃を蒙て居るのは何故か。即ち右の先生方が十分に此の硬墨を遣ひこなす丈の腕力を備へて居られるからであらうかと存じ升。之を要するに餘り仕事の容易なのを望むのは、結局藝を墮落させる基であらうと自分は考へて居るのであり升。

却説本邦でも明和・天明の頃迄は明墨がかつゝ残て居た様であります。夫より以後は殆遣ひ盡したものと見江て、其頃から後の書画は大抵皆清墨、即柔墨で書たものであり升。その證據には彼の應舉・呉春・景文等の畫が段々剥脱て来るのを御覧なされ。是は經師屋が下手な故ではないので、全く墨が悪いからであり升。之を以て觀ますと、此の柔墨の寿命はせいぜい三百年位しが保たぬものと見え升。兎に角近代の諸大家が、斯の書画の命根とも謂つべき墨に就てあまり注意され

なんだのは、實に千載の遺憾でムリ升。獨り谷文晁子、此人は流石に用意の周到な人で、常に弟子に語て云ふには、今の唐墨は後古に至て必脱る患があるから、心して用ひねばならぬと戒められたさうで、是は柴田是眞翁から承つた話でムリ升が、其後又さる老練の經師匠の話に、近代の書画の中では文晁の画が最も落ち難いと申すことを聞きまして、益々文晁子の用心の深切なことを感じました。扱其處へ參ると唐・宋・元・明の硬墨の機能は顕著しいもので、即彼の弘法大師・狩野家乃至黄檗の名僧等の書画が、今に至て墨色が依然として淡墨の處までが宛も湿ひの未乾かざるものゝ如くに底に光を含んで居るので分明り升。今の唐墨を淡墨に用れば、必然脱て了ひ升。應擧や景文の山水畫に遠山の欲いと思ふ處に遠山の無いのが往々有りますが、是は盖脱去て了たのであろうと申す説でムリ升。

扱又牧溪・周文の画は高尚優美にして俗氣が無いと云ふので、古々の先生家が頗る此画風を慕ひますが、成程是は二先生の腕力も勝れ、氣韻の異た處もあるからには違ひないが、一には墨を大に撰んだものであらうと愚老は考へるのでムリ升。その理由は工欲<sup>タクミ</sup>善<sup>スレハ</sup>クセントニ其事<sup>ヲ</sup>必先<sup>ツ</sup>利<sup>リス</sup>ニ其<sup>器</sup>で、凡て何の技藝に限らず、古昔から名人と稱へられた人の作物を視るのに、必其下地から吟味してある。例へば正宗の刀は鐵の鍛方が異ふ。後藤の彫物は地金の撰み方が別である。柿右衛門の陶器は土の性が特殊ふと云ふ様に、一々その材料から精撰して、十分氣に入た處で着手するので、なか／＼有合の品や出来合の物で匆卒に作たものではありませぬ。されは正宗の刀を視ると、冴の工合から焼刃の匂、少くも眼に障る所がなく、温然として玉の如くに見江る。其他彫物でも陶器でも、名人の作は孰も言ふに言はれぬ趣味が有て、幾度見ても見褪がせぬ。視れば視る程面白い味が出て来る。是何故に然うかと云へば、即ち材料の根基からして、全然他の凡流のと其撰を異にして、猶且手間・暇言はずに一心を籠た、其骨折りが自然と看者の心・目に反射するのであらうと存じ升。今愚老が墨を作るにしても、佳墨を造らうとする時は、油煙や阿膠は申すに及ばず、水から薪の炊方まで悉く吟味致し升。夫故出来上た其の物か何となく妙味が有り升。画も亦右の道理で、名画は

必良墨を須たなければ、謂はゆる神韻縹渺の處を十分に發揮することが難しいからうと思ふのでムリ升。猶牧溪の墨の事に就ては注意すべき話がある。夫は彼の有名な松花堂先生、此人は澤庵和尚より牧溪の遺墨を得て、爾來用墨の法が大に進んだと言傳へてある。けれども愚老の考には、是は何も用法が別段進んだと云ふ譯ではない。素より用法には注意して居る先生が、一旦佳墨を獲た故に忽墨の妙處が發揮して、一層其人の伎倆の進んだ様にも見えたのであらうと思はれ升。又周文の墨の事に就ては別段聞及びませぬが、是も名人のこと故必其揆を一にして居るであらうと思はれる。夫故愚老は牧溪・周文の二先生は大に墨を撰んだものに違ないと信じて居るのでムリ升。今日吾問では、随分立派な先生方までが、動もすれば、古人腕力自在にして用墨其法を得たるが故に、墨氣飛動して物々生色を帶ぶ、是今人の及ばざる所である。と云ふ様な議論を吐かれるが、是は墨の製法が清朝の初に當て一変したことを知らずに一向古人を買被つた説で、今人と雖も苟も良墨を用ひさへすれば決して古書画の色澤に劣る理はないのでムリ升。尤も墨の精品になると、其分子が極めて緻密であるから、絹紙を染めた所で濃處は濃所、淡處は淡處で各々言ふに言はれぬ美色を呈す。其を名人は胸中に蓄へた妙趣向を以て自在に按排するから、濃淡の色合が誠に明了として而も温しく、遠近の工合も活物の様に見える。床に懸れば座敷總躰の品位が引立て来る。是畢竟墨の精と技の妙とが相須て然るのである。されば墨が如何に美墨であつても、揮毫其人を得ざるときは、墨の美と云ふ處は見えても、妙と云ふ處は別段發頭れない。夫故愚老は我が墨の爲にも益々書画の名人が古に輩出せんことを熱望するのでムリ升。

元來愚老は繪の事は一向辨へませぬが、只墨の研究の爲に新古の画を觀るのを殊の外面白く感じ升乃で、段々古代の画を視まするに、明画も中々妙味が有りますが、宋時代の画は又格別で、何處となく韻致に富で、温然として玉の如く意匠が善く周到いて、些も霸氣が有りませぬ。これが妙な理で、墨や筆は何でも関はぬと云ふ様な、所謂豪放を尚ぶ時代の画は、兎角霸氣が強くて、見て居る内に厭氣が參りますが、宋画に至てはトント其の弊がない。是と云ふのも畢竟、當時は東坡や山

谷の様な人物が輩出して、墨氣・墨色のことを八釜敷申したのが一の原因に成て居らうと思はれる  
ムリ升。就中東坡の如きは墨の事に餘程委しかったものと見えて、是う云ふことを言て居る、「余  
墨を藏すること数百挺、暇日之を品試するに、遂に黒きものなし、其の間一・二の人意に可なるに  
過ぎず。吾間の佳物自らはれ得難し。茶は其の白きを欲し、墨は其の黒きを欲す。方に黒きを求む  
る時、漆の白きを嫌ひ、方に白きを求むるとき雪の黒きを嫌ふ。自らはれ人の會せざることなり云  
云」實に斯う云ふことは大概の墨工には殆氣の附かぬ位なもので、能くも斯様な精微な處まで眼が届  
いたものと感服致します。其の位の吾間であるから、一般の画工先生も定めて墨の事は能く調べた  
で有りませう。随て墨工も頗骨が折れたに違ない乃で益々精良の品が出来る。又夫に連れて画工も  
愈其腕を磨くと云う様な譯で、要之宋代の画をして一際優れて氣韻を高尚ならしめたのは、勿論画  
工の腕前も有らうが、一には墨の精良と云ふことが大に與て力あるもので有つたらうと考るのでム  
リ升。されば今日我邦の画家先生に於ても其の伎倆の日に月に進歩せらるゝに就ても、益々墨の撰  
擇に注意せられて、遂に我が明治盛代の美術をして古今萬國に冠絶せしむる様に致したいものでム  
リ升。

此程或画家先生からの御話に、近頃は西洋人も大分日本画に對する眼が明て來たと見えて、着色  
画よりも墨画の方を好む者が段々殖て來た。其説を聞くに、單に墨の濃淡ばかりで能く花鳥・人物  
・山水等の眞趣を写し出すのは、日本美術の特長であると云ふので、殊の外賞讃して居る。蓋し  
西洋の方は彩色の術が大に開けて居て、繪具の種類も吾邦よりは数十倍も多い。雖然繪具と云ふも  
のは素より死物であるから、如何に彩色を緻密にしても、天然界の草本の花の色や、葉の色の活々  
した處や、鳥獸の羽毛の艶々しい工合には到底及ぶものでない乃で、其の死だ繪具を濃厚と塗立た  
繪から視ては、淡泊な墨繪の方が復はるかに高尚で韻致に富んで居ると云ふことを、漸々了悟て來たもの  
であらう。さすれば、今後は大に墨画の流行を來らすであらうと思ふ。随て従来は画工の中にも餘  
り墨色を八釜敷云ふ人が鮮かつたが、今後は西洋人も活眼を開いて之を評する様に成るであらうし、

況て此方の人は眼力が益々精微の域に進んで、苟も繪画を品評するには、運筆の巧拙や布置の如何を論ずる外に、必墨氣の優劣を細論する様な風に成つて、今五・六年も過ぎたら画工等が大に墨と云ふものに重きを置く様に成るであらうと云ふ話でムりました。是は何様左もありさうな事でムリ升。猶又愚老の考には、従来墨の本家貌をして居た支那人も、追々自國の墨の寿命の短いことや、色合の劣て居ることゝを覺知て參たならば、遂には我が改良墨を望む様にも成るであらう。随て古來久しく彼の輸入を仰いで居た吾邦から、却て彼に向つて輸出する様に成つたならば、誠に愉快なことであらうと存じ升。

擲以上で木麩の御話は終りましたが、序に墨の鑑定法を一二條御参考迄に申上げて置ませう。先清墨と我が改良墨の優劣を試験するには、双方の墨を同質の硯で同じ程に濃く磨て、夫を各々漆板の上に塗て、乾いた處で水中に浸して看る。すると改良墨の方は毫も異状が有りませぬが、清墨の方は忽色が變て青色を帶て来る。是は柔質の膠分を多量に含んで居る爲に、其の反應を現すのであり升。夫故再乾かしても復本の色には戻りませぬ。

扱愚が熟く感心した事があります。藝が行届けば行届くほど眼光が能届く。古人の名画を見ても此所は面白く出来てある。此所はまだ及ばぬ此位は随分書ける。此濃淡は味ひが妙だ、此墨氣が及ばぬ。如何にせば行ならんと、段々と眼光が紙背に徹するまでに至りて腕の働きハ粗行くが、今一ツ墨氣ハ腕の冴へぬ故か届かぬと思う所へ佳墨が来る。成程是だと直ッ分かる。夫といふがケ様なことがある。愚老の墨が明治廿五(一九一二年)・六年頃橋本雅邦翁が一度使つて見て非常に喜んで、其後此墨ばかり使つて居る。美術學校の生徒が師匠が良いと言ふ故争ふて之を使ふ。描て直に水を引く、流れる。先生に梅仙墨は流れ升がと云ふ。先生曰、夫が佳のですと、誰が問ふても先生ハ夫が佳のですと云ふ。余も先生は仰と書本(等)を問ふ。愚老の墨は流れ升が先生曰、乾かぬ内に水を引けば流れ升と、先生は如何致します。夫は三四枚書懸けて乾きし分より其杯(等)は朝早く涼しき内に水を引ますと、素知らぬ顔で答へました。

扱此流るゝといふ事外の人達ハ悪しきやうに申升が、新墨ハ五六年ハ何れも流れ升、悪墨は流れませぬ。夫は膠が粗末で力が強い、直に締て乾く。佳墨は烟・膠共に分子が細い。乾かぬ内に水を見れば展びる。水を以行けば極々薄く有るか有らぬまで展びる。地量や雲烟縹渺の妙ある所以で、製墨では第一六しい。始ハ流るゝと悪しく云ふ人も、七・八年位より誠に能くなり、大事の物を書く時よりハ使はぬといふ。最前中、藝が熟する程眼光が届くと申通り、東京に多くの画家がある。其中で寺崎廣業君・鈴木華邨君・川合玉堂君等が先眼に着て雅邦翁の面の墨氣が勝れて違ふ。是は腕力が違ふ故であらうと、中にも寺崎君が水を遠方から寄せ、又自分に念を入れて磨り、種々にしても墨氣が出ぬ一日翁を尋ねて、如何にすれば彼様な墨氣が出ますかと、翁は笑ふて一笏の墨を出し、余は近年此墨を用ひ升使ふて見なされと。見れば香壁梅仙作るとある。還て雲龍を描く、雲氣の工合面白く他墨でハ出来ぬ妙味が出た。成程是迄は腕だとのみ思ひしに墨でありしか。始て之を知り翁の眞率に隠しもせず、直に示されたを感心したとの事。又信州渋の温泉場の南面の大家児玉果亭君に墨談一冊極品清烟の小サキとを送りしに、墨談にある清の唐墨は落安い又変色する。梅仙ハ明墨法で製する違ひがあるといふを、先生は直ちに試みたりと丁寧に手紙をくれ曰、極品清烟と支那墨四・五品とで別々に認め、二・三時間乾して滾水をたつぷり引き試みしに、極品清烟は依然として少しも変わりなく、唐墨は或は流れ・或ハ剥奪に近く・或ハ灰色に変し中に十笏の小サキ墨と書きたるは別に來りなし、大に貴説の確實なるを信じて疑はぬと申來り。愚老も大に感心して何れ大家ハ大家丈々に、同じく墨に重きを惜き人の言をも容易に聞流し見流しにせぬ。此先生も以來ハ拙墨のみを遣ひ、唐墨の悪しきを書生に申て居るさうです。京都の富岡鐵齋先生も始終用ひられて、少しも苦情がありません。併し墨の微妙な面白きハ、分子の細かに膠の熟したるにあり、初心の人ハ流して墨の悪しきが如く言ふ。此ヲ以此度上等の流れ故名を製して竹龍とゆふ。絨やわらかくて其妙味を知るべし。

清墨で書た物は只夫ばかり見て居れば随分黒いと思ひますが、夫を改良墨で書た物の側に直と駢

へて看ると、忽赭色が見江て參り升。又從來清墨ばかり用ひてゐた先生が始めて愚老の墨を用ひて、雲烟杯(等)を描くに、從來の手心で書くと餘り黒過て失敗すると云ふ御話を毎度承り升。是は墨の分子が極めて細い故でムリ升。又書損等をした場合に、清墨ならば石鹼水で洗へばスツカリ脱て了うふが、改良墨の方は何様洗せにしても脱ないで困ると云うふ御小言が屢有りますが、此御小言は愚老の尤も喜んで頂戴致す所でムリ升。

先清墨との優劣論は此位にして猶一條御注意を願つて置きたいのは、佳墨を使ふときには必一々硯を洗て新しい水を用ると云ふことで、殊に新墨の場合には尤も是が肝要でムリ升。又膠の性は暑に弱くして至て湿氣を惹き易い。依て夏分には能く乾いた古墨を使ひ、冬分は新墨を使ふも宜しい。夫は冬は膠が乾くからでより升ある。又墨は幾年でも古い程宜しい様に古人は思つて居り升が是は大なる誤で、使ひ頃は先三年位から漸々佳く成て參り升が、其の眞の佳境に入るのは十年から二十年位の處で、夫から百年位迄は可レラムります。夫より二百年・三百年にも成つては逆も實用に任るものでは有りませぬ。されば今の古に明墨だと云ふて珍藏せられて居る物も往々有りますが、若し其が苟も實用になる程の硬度であつて、且幾分の光澤を存して居るものならば、必清代の贗墨であると断言して差支ムりませぬ。愚老が多年の經驗から考へ升と、先前條の様なもので三百年位で落て仕舞ふと、千年・千五百年傳へて些の変化なきとハ、其始め高價いとか安價いとか少しの違いで後年に至つて如此の違ひが出来升。

愚老ハ元來金を儲けると云うより美術を惜しむの心が重い。昔の谷文晁や丹羽盤桓子の心に成て考へると實に此改良は愚老一人の心ではない。古界の美術心のある方々の早く後吉子孫の爲を考へて貰いたいと思ひ升。試みに應舉時代より後の繪で第一唐墨の落易い事を考へて無理にも和墨を用ひた文晁の繪と、外の唐墨画とを洗ひ競へて御覧なされ。文晁の繪ハ落ちません、外の繪ハ直に白ツぽく成て来ます。狩野の繪の墨氣の良きも是故で有ります。近來如此清墨画の煤を洗ふて段々落る得意には立腹する。依て明礬水を引き水分を受けぬやうにして洗ふに至る。併夫でも永くハ持升

まい。猶墨に就ての南画派の画伯ハ兎角支那物を尊重する風あつて清繪<sup>？</sup>画<sup>？</sup>て墨法の一変したる事を知らず宋元明以来□法のであると思ふて居るらしむ。墨法の変化したる事を早く知らせた力<sup>？乃</sup>である。

東京本郷元町一ノ廿四

鈴木梅仙

へ

居室

あとがき

鈴木梅仙は、天保七年<sup>(一八三六年)</sup>一月十一日、田辺市の下秋津村安井、鈴木喜平の二男として生まれ、本書にある通り学を以て身を立てようとし、勉学に励んだが病弱のため断念し、松煙問屋を営む兄の家業を助けるうち、紀州の名墨藤代墨の故事にふれ、製墨の研究に打ち込み、やがて、すぐれた墨匠として知られ、明治・大正期を通じ、書家や芸術家などの用墨の委嘱を受けたことから、梅仙墨の名を高め、宮内省御用墨ともなりました。<sup>(一九一八年)</sup>大正七年十二月十五日歿

この『墨のはなし』は美濃紙三十六枚毛筆書き。鈴木梅仙の雑誌投稿原稿で、外表紙は後年付け加えたものである。和紙の内表紙及び最後のページは梅仙自筆に間違いない。また晩年梅仙が不自由な手で所々修正加筆している所を見ると梅仙自筆で所有していたものと思われる。

平成二十三(二〇一一)年五月二十日(金)

清水章博